

第7回 JLPP 翻訳コンクール 仏語部門講評

上智大学文学部フランス文学科教授
博多かおる

今回、第7回 JLPP 翻訳コンクールフランス語部門の審査に携わらせていただいたことを大変光栄に思います。同じテキストと向き合っている言語に訳していくとき、それぞれの方の思考や感覚、さまざまな言語体験がそこに染み込みこんでいくことの不思議さをあらためて感じることができました。

川上弘美「夏休み」についてですが、この短編の独特な空気感を表現することはそう簡単なことではないかもしれません。梨の収穫というある意味日常的で単調で、しかし季節とともに終わる作業が運ぶ時間や予感と、唐突な出来事、感情の起伏が最終的にどんなふうになるのか。各応募者が、梨と結びついた不思議な存在の言葉や、話者となっている人物の「ずれ」の感覚などの解釈と表現に注意を払い、口語の響きやリズム、話法の切り替え、味のあるフランス語表現に工夫をこらしていることが見てとれました。

保坂和志「言葉の外へ——文庫まえがき」に関しては、原文の言葉の勢いやニュアンス、書き言葉の「口調」のようなものを伝えることの難しさを痛感しました。その中でも、さまざまな翻訳に、柔軟に文の構造や発想等を置き換えても論理がずれない工夫などがみられました。

最優秀賞の Julie Ackerer さんの「夏休み」訳は全体に流れがよく、会話のリズムのつながりや言葉の「音」も巧みに表現されています。作品中のさまざまな次元の分岐点で言葉に耳を澄ますことでさらにめりはりが出るかもしれないと思いました。評論の翻訳は、非常に知的で巧妙でした。精密で、語彙の豊かさが光り、日本語でやや込み入った論理の箇所もフランス語の明快な論理性を生かして訳されていたと思います。

優秀賞の Harald Wendler さんの「夏休み」訳は、話法に工夫を凝らし、主人公の台詞にイタリックを使って地の文の中に投げ出すなどして会話の空間に奥行きを出しています。また言葉に勢いがあり、描写の中にも光や感情がこもって光景が立体的に見えるようでした。評論の訳では、明確な論理性を保ちながらも、原文の言葉つきを伝えようとする工夫が特に冒頭では文体に見られ、それをさらに押し進められる可能性を感じました。

同じく優秀賞の Géraldine Oudin さんの「夏休み」訳は会話のリズムがよく、語呂もうまく表現されており、「ずれ」「だめ」といったキーワードの訳出にも解釈と工夫が光っていました。出来事を淡々と語りながら感情を浮き彫りにし、伝達できる訳だと思います。評論の訳では、文意を咀嚼した結果やや文意から離れた箇所など悔やまれますが、文章に流れと凹凸があります。

ここで扱うことのできなかつた翻訳にも、読んでいて感動させられたり、なるほどと感心させられたりする箇所がたくさんありました。このような場に参加させていた

だいたことを心より感謝いたします。